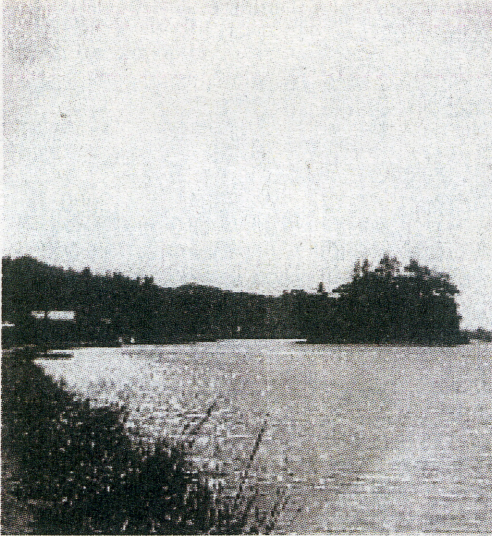


鳥根の記憶

神等去出さん——。神在月、全国から出雲に参集した八百万の神々が、それぞれの国におたちになる際の祭事をいう。松江市朝酌町で五本の川が合流する地点のすぐ沿岸の森にある多賀神社でも、今月二十五日夜から翌朝にかけて行われる。

神々は鹿島町の佐太神社か

らここに集い、直会をして帰っていく。本来の立ち寄り先は境内北側の魚見塚古墳で、高台から大橋川を見下ろし、恵比須神の漁の様子をご覧になるのだとも。この邪魔をしないよう、多賀神社の参道二か所にしめ縄を張って人の出入りを封じ、翌朝、縄を解く。「夜、用を足していると神



河畔から大橋川を望む(若松秀俊・東京医科歯科大学大学院教授の提供)

多賀神社と河畔

⑬

さまに尻をなでられるから、

『夜は便所に行ったらだめ』

というのが子供たちの常識だった。失礼に当たるといふことだったんでしょねえ」。神社に程近い同市東津田町の三島昌彦さん(81)が振り返る。

三島さんは子供のころ、神社周辺を遊び場にしていた。大橋川沿いを撮影したドイツ人哲学者フリッツ・カルシュの写真に関心を持つ若松秀俊・東京医科歯科大学大学院教授を約二年前、長男の昌彦さん(49)と一緒に案内したことがある。

めいの知人を通しての出会いだったが、親子とも、松江の人でもほとんど知らないカルシュを研究し、「写真の現場を自分の目で確かめたい」という教授の熱意に打たれ、マイカーを出してその後も枕木山や宍道湖畔などを巡

った。

昌彦さんは、昭和の初め、この地を訪れたカルシュが何を感し、自身の学問をどう発展させたかに興味が尽きないという。

「近代にまだ毒されていない純朴さを目の当たりにし、皆が幸せに生きるための意味と知恵作りを熟成させたのではないか、とひそかに見ているんですがね」



大橋川沿いの森に多賀神社の鳥居が見える

幸せ願う素朴な世界